

ヤマト政権の成立と東アジア情勢の変化

〔 ヤマト政権の成立と前方後円墳 〕

() による 266 年の西晋への遣使以来、約 150 年にわたって中国の歴史書に日本の情報が記載されることはなくなり、「空白の 4 世紀」と表現される時代が訪れるのであるが、この時代において「 」が成立したと考えられている。

邪馬台国がそのままヤマト政権へと発展したのか、それとも近畿地方で発生した全く新たな勢力がヤマト政権に発展したのか、いまだにはっきりとしたことは明らかにされていないということは前述したとおりであるが（詳細は講義プリント『原始時代⑤弥生時代C 地域連合国家「邪馬台国」の成立』に記載）、それに対して、ヤマト政権は、その中心勢力が () 県の () 山付近に位置していたということが明らかにされている。

□ 「 」

⇒ 畿内の有力な豪族（かつての小国の「王」一族のこと）を中心とする連合政権。三輪山のふもとにあった豪族の王（「 」と呼ばれる）を盟主と仰ぐ。遅くとも 4 世紀中頃までには中部地方を含める西日本の大部分に勢力を広げた。『 』には、朝鮮半島にまで進出していたとの記述も見られる。中心勢力が奈良県＝大和に位置していたことや、倭を“やまと”とも読むことなどから、この呼称が一般化した。この政権が後の朝廷に発展し、そして大王家が現在にまで至る天皇家に繋がっていくとされる。
※邪馬台国論争での「近畿(畿内)説」を採るなら、三輪山のふもとにあった小国こそが邪馬台国である可能性が高い。

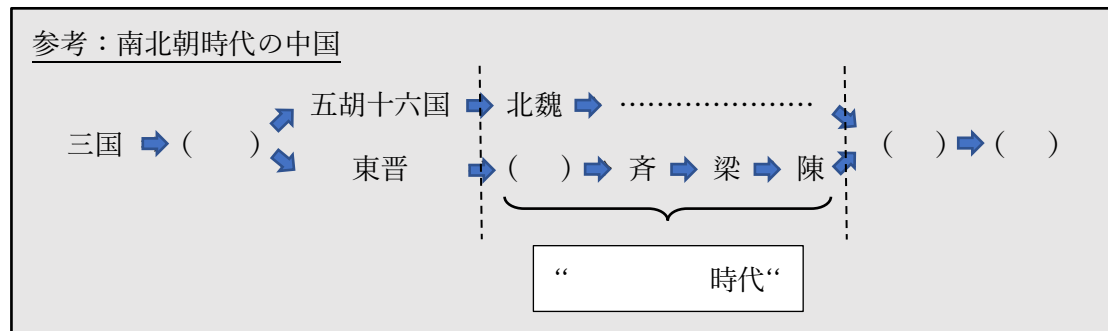
大王は () であった = 世襲王権制が確立した

弥生時代には、墓の形は地域によってさまざまであったが、3 世紀後半から 4 世紀にかけて、西日本の各地で同様の形をした古墳が営まれるようになった。「 」である。この古墳の形態が奈良県、すなわちヤマト政権の中心勢力地域から端を発するものであることから、前方後円墳の分布の範囲が、ヤマト政権の勢力範囲に一致すると考えられる。各地の豪族によって造られた前方後円墳が、大王のそれよりも小さいということも、各地の諸豪族を上回る権力を持っていた大王が、彼らを支配していたことを示しているとされる。



〔 4 世紀における東アジア情勢 〕

3 世紀後半に成立した西晋は、4 世紀頃には南へと移り東晋と呼び方を変える。それと同時期、中国北部に五胡十六国時代と呼ばれる小国分裂の時代が訪れたのち、439～589 年までの間、中国は完全に南北に分かれ、それぞれの地域で独自の王朝交代を繰り返されるという“ 時代“が到来した。これにより、中国の権威・権力が半減したために、中国の周辺地域に対する支配力が弱まり、4 世紀の東アジアでは国家形成の動きが伸展したのである。



() は、313 年に楽浪郡を、さらに翌年には帯方郡も滅ぼして勢力を南に拡大し、中国東北部から朝鮮半島北部に至るまでを領土とした。朝鮮半島南部に目を移すと、馬韓が () へ、辰韓が () へと成長し、ともに統一国家となったが、残る弁韓は、() と呼ばれ、いまだに小国分立の状態が続いていた。朝鮮半島の東、日本(倭)では ()



が成立し、遅くとも 4 世紀中頃までには中部地方を含める西日本の大部分に勢力を広げた。ヤマト政権は伽耶諸国を “ ” とよび、日本府を置いていた＝その一部を支配下に置いていたとの記述が『 』に見られる。この地域は () 資源の供給地としての役割を果たしていたと考えられている。

● 4 世紀における東アジア情勢まとめ ●

- ・ 中国が () 時代に突入
- ・ () が南下政策を採り、強大化
- ・ 馬韓が ()、辰韓が () に成長。弁韓は () と呼ばれるように
- ・ 日本では () が成立か？



[ヤマト政権の対外政策]

○ 4 世紀の対外政策

4 世紀、高句麗が南下政策を採って強大化し、百済・新羅・伽耶諸国地域が圧迫されていたというのは前述したとおりであるが、朝鮮半島に勢力を伸ばしつつある高句麗と、同様に勢力を伸ばそうとしていた倭との間で（ ）年、かつての帯方付近にて交戦があり日本側が敗れたという金石文が、現在の中国（ ）にある『 』に刻まれている。「空白の」4 世紀における日本の情報を伝える貴重な史料である。なお、同史料によると、4 世紀のヤマト政権は（ ）も影響下に置いていたという。

○ 5 世紀の対外政策

5 世紀になると、中国の歴史書に、日本に関する情報が再び記載されるようになる。中国ではいまだに南北朝時代が続いているのであるが、(北・南) 朝の（ ）という王朝についての歴史書『 』が手掛かりとなる。

□『 』

⇒ 中国南北朝時代の詩人（ ）によって編纂された、南朝の宋についての歴史書。この中の「 』という部分において、ヤマト政権の 5 人の大王が朝貢してきたとの記載がある。 “ = (. . .)

◎なぜ日本は再び中国に冊封されたのか？

↳ 冊封体制：中国の皇帝に朝貢してきた周辺諸国の君主を王に任命してその地域の統治を認める一方、自らを宗主国、周辺諸国を属国という従属的な関係に置いて、国際秩序を維持しようとする体制

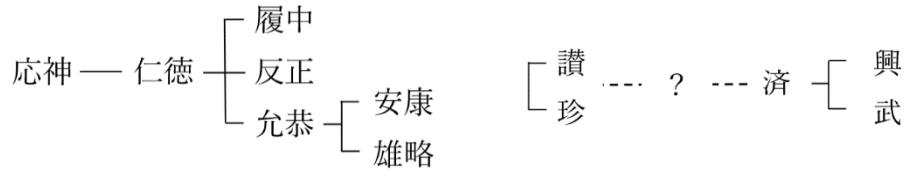


ヤマト政権は、中国の皇帝に冊封を行い、周辺地域の統治を認められれば、
[]
と考えた。

倭の五王のうち、讃と珍については、『日本書紀』『古事記』に記されているどの天皇に該当するかいまだはっきりしていない。一方、済と興と武については、それぞれ（ ）天皇、（ ）天皇、（ ）天皇でほぼ間違いないであろうと言われている。なお、武＝雄略天皇は、埼玉県にある（ ）古墳から出土した鉄剣と、熊本県にある（ ）



古墳から出土した鉄刀に記された金石文における人物名 “ ” に一致することが確認されている。



○倭の五王まとめ

- ・ 済 = () 天皇、興 = () 天皇
- ・ 武 = () 天皇 = ()

↳ 埼玉県『

』 金象嵌(眼)

熊本県『

』 銀象嵌(眼)

金属や木などの表面に文字を彫り、そこに金・銀をはめ込む工芸技法をそれぞれ () ・ () と呼ぶ。

興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓
 ① 七国諸軍事、安東大將軍倭国王と称す。順帝の昇明二年、使を遣はして表を上
 ② ③ ④ りて曰く、『封国は偏遠にして、… (略☆) …』と。詔して武を使持節都督倭・
 新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王に叙す」

(『 』)

※①「() が死んだ後、弟である () が位についた」の意

※② 西暦 () 年のこと

※③「冊封された我が国は、中国から見てはるか遠くにあり」の意

※④「(そこで順帝は) 詔を発し」の意

武は当時の宋の皇帝であった () に対して、朝貢の遣いを派遣し、自分は倭と朝鮮半島の六国における地域的・軍事的権限を持っていて、これら7地域は全てヤマト政権の支配が及んでいると主張したのである。(略☆) 部分には、その根拠、すなわちヤマト政権がいかにして倭国内を統一し、さらに海を渡って朝鮮半島南部を支配下に置いていったかといったことが述べられている。そこで順帝は武に対して、「 」



という称号を与えた。一つ国の数が減っているのは（ ）が外されているからである。
この国は既に宋の冊封体制に組み込まれており、その地域を支配することを皇帝に認めら
れていたからだ。

[解答例]

4 世紀、朝鮮半島北部には南下政策を行って勢力拡大を図る高句麗が進出し、南部では百済・新羅という統一国家が形成された。伽耶地域はいまだ小国分立が続いており、倭が先進技術や鉄資源の獲得を目的に進出した。4 世紀末、好太王碑によると、かつての帯方付近で倭が高句麗と交戦し敗れた。5 世紀になると倭の五王が南朝の宋に朝貢し、武は六国諸軍事安東大將軍という、百済を除く朝鮮半島南部の支配を認められる称号を得た。

(198 文字)



問. 4・5世紀の朝鮮半島情勢と、その地域における日本の進出について 200 文字以内で述べよ



ヤマト政権の成立と東アジア情勢の変化

〔 ヤマト政権の成立と前方後円墳 〕

(堯与) による 266 年の西晋への遣使以来、約 150 年にわたって中国の歴史書に日本の情報が記載されることはなくなり、「空白の 4 世紀」と表現される時代が訪れるのであるが、この時代において「 ヤマト政権 」が成立したと考えられている。

邪馬台国がそのままヤマト政権へと発展したのか、それとも近畿地方で発生した全く新たな勢力がヤマト政権に発展したのか、いまだにはっきりとしたことは明らかにされていないということは前述したとおりであるが(詳細は講義プリント『原始時代⑤弥生時代C 地域連合国家「邪馬台国」の成立』に記載)、それに対して、ヤマト政権は、その中心勢力が(奈良) 県の(三輪) 山付近に位置していたということが明らかにされている。

□ 「 ヤマト政権 」

⇒ 畿内の有力な豪族(かつての小国の「王」一族のこと)を中心とする連合政権。三輪山のふもとにあった豪族の王(「大王」と呼ばれる)を盟主と仰ぐ。遅くとも 4 世紀中頃までには中部地方を含める西日本の大部分に勢力を広げた。『日本書紀』には、朝鮮半島にまで進出していたとの記述も見られる。中心勢力が奈良県=大和に位置していたことや、倭を“やまと”とも読むことなどから、この呼称が一般化した。この政権が後の朝廷に発展し、そして大王家が現在にまで至る天皇家に繋がっていくとされる。

※邪馬台国論争での「近畿(畿内)説」を採るなら、三輪山のふもとにあった小国こそが邪馬台国である可能性が高い。

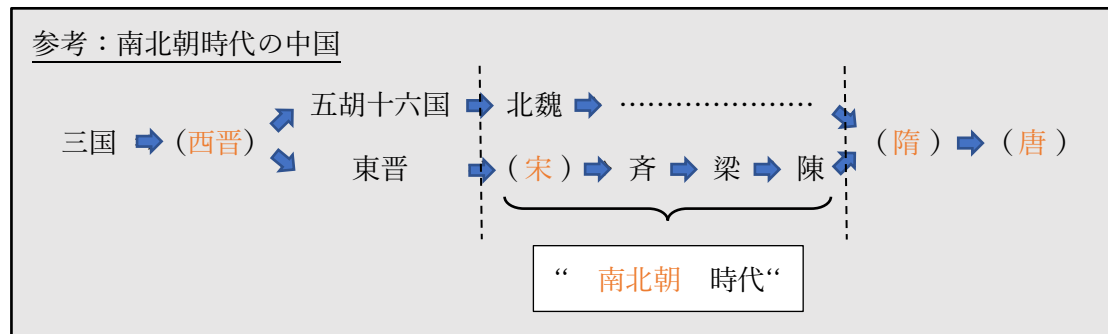
大王は(世襲制) であった = 世襲王権制が確立した

弥生時代には、墓の形は地域によってさまざまであったが、3 世紀後半から 4 世紀にかけて、西日本の各地で同様の形をした古墳が営まれるようになった。「 前方後円墳 」である。この古墳の形態が奈良県、すなわちヤマト政権の中心勢力地域から端を発するものであることから、前方後円墳の分布の範囲が、ヤマト政権の勢力範囲に一致すると考えられる。各地の豪族によって造られた前方後円墳が、大王のそれよりも小さいということも、各地の諸豪族を上回る権力を持っていた大王が、彼らを支配していたことを示しているとされる。

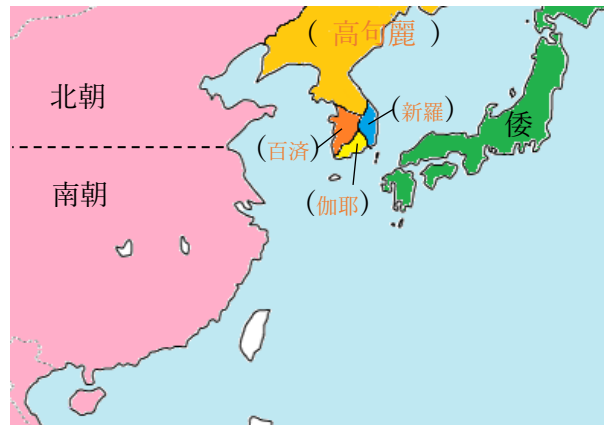


〔 4 世紀における東アジア情勢 〕

3 世紀後半に成立した西晋は、4 世紀頃には南へと移り東晋と呼び方を変える。それと同時期、中国北部に五胡十六国時代と呼ばれる小国分裂の時代が訪れたのち、439～589 年までの間、中国は完全に南北に分かれ、それぞれの地域で独自の王朝交代を繰り返されるという“ **南北朝** 時代”が到来した。これにより、中国の権威・権力が半減したために、中国の周辺地域に対する支配力が弱まり、4 世紀の東アジアでは国家形成の動きが伸展したのである。



(**高句麗**) は、313 年に楽浪郡を、さらに翌年には帯方郡も滅ぼして勢力を南に拡大し、中国東北部から朝鮮半島北部に至るまでを領土とした。朝鮮半島南部に目を移すと、馬韓が (**百濟**) へ、辰韓が (**新羅**) へと成長し、ともに統一国家となったが、残る弁韓は、(**伽耶(加羅)諸国**) と呼ばれ、いまだに小国分立の状態が続いていた。朝鮮半島の東、日本(倭)では (**ヤマト政権**)



が成立し、遅くとも 4 世紀中頃までには中部地方を含める西日本の大部分に勢力を広げた。ヤマト政権は伽耶諸国を“ **任那** ”とよび、日本府を置いていた＝その一部を支配下に置いていたとの記述が『 **日本書紀** 』に見られる。この地域は (**鉄**) 資源の供給地としての役割を果たしていたと考えられている。

● 4 世紀における東アジア情勢まとめ ●

- ・ 中国が (**南北朝**) 時代に突入
- ・ (**高句麗**) が南下政策を採り、強大化
- ・ 馬韓が (**百濟**)、辰韓が (**新羅**) に成長。弁韓は (**伽耶諸国**) と呼ばれるように
- ・ 日本では (**ヤマト政権**) が成立か？



[ヤマト政権の対外政策]

○ 4 世紀の対外政策

4 世紀、高句麗が南下政策を採って強大化し、百済・新羅・伽耶諸国地域が圧迫されていたというのは前述したとおりであるが、朝鮮半島に勢力を伸ばしつつある高句麗と、同様に勢力を伸ばそうとしていた倭との間で（ 391 ）年、かつての帯方付近にて交戦があり日本側が敗れたという金石文が、現在の中国（吉林省）にある『 好太王碑文 』に刻まれている。「空白の」4 世紀における日本の情報を伝える貴重な史料である。なお、同史料によると、4 世紀のヤマト政権は（ 百済 ）も影響下に置いていたという。

○ 5 世紀の対外政策

5 世紀になると、中国の歴史書に、日本に関する情報が再び記載されるようになる。中国ではいまだに南北朝時代が続いているのであるが、（北・南）朝の（ 宋 ）という王朝についての歴史書『 宋書 』が手掛かりとなる。

□ 『 宋書 』

⇒ 中国南北朝時代の詩人（ 沈約 ）によって編纂された、南朝の宋についての歴史書。この中の「 倭国伝 」という部分において、ヤマト政権の 5 人の大王が朝貢してきたとの記載がある。 “ 倭の五王 ” = （ 讃・珍・済・興・武 ）

◎なぜ日本は再び中国に冊封されたのか？

↳ 冊封体制：中国の皇帝に朝貢してきた周辺諸国の君主を王に任命してその地域の統治を認める一方、自らを宗主国、周辺諸国を属国という従属的な関係に置いて、国際秩序を維持しようとする体制

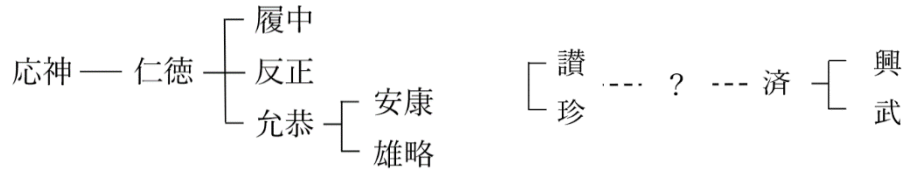


ヤマト政権は、中国の皇帝に冊封を行い、周辺地域の統治を認められれば、
[朝鮮半島における政治的立場を強化でき、朝鮮半島での利権を維持しやすくなる]
と考えた。

倭の五王のうち、讃と珍については、『日本書紀』『古事記』に記されているどの天皇に該当するかいまだはっきりしていない。一方、済と興と武については、それぞれ（ 允恭 ）天皇、（ 安康 ）天皇、（ 雄略 ）天皇でほぼ間違いないであろうと言われている。なお、武＝雄略天皇は、埼玉県にある（ 稲荷山 ）古墳から出土した鉄剣と、熊本県にある（ 江田船山 ）



古墳から出土した鉄刀に記された金石文における人物名 “ **ワカタケル大王** ” に一致することが確認されている。



○倭の五王まとめ

- ・ 濟 = (**允恭**) 天皇、興 = (**安康**) 天皇
- ・ 武 = (**雄略**) 天皇 = (**ワカタケル大王**)

↳ 埼玉県『 **稻荷山古墳出土鉄剣銘** 』 金象嵌(眼)
 熊本県『 **江田船山古墳鉄刀銘** 』 銀象嵌(眼)

金属や木などの表面に文字を彫り、そこに金・銀をはめ込む工芸技法をそれぞれ (**金象嵌**) ・ (**銀象嵌**) と呼ぶ。

興死して弟**武**立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓
 ①
 七国諸軍事、**安東大將軍**倭国王と称す。**順帝**の昇明二年、使を遣はして表を上
 ②
 りて曰く、『封国は偏遠にして、… (略☆) …』と。詔して武を使持節都督倭・
 ③ ④
 新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓**六国諸軍事安東大將軍**倭王に叙す」
 (『 **宋書** 』 **倭国伝**)

- ※①「(**興**) が死んだ後、弟である (**武**) が位についた」の意
 ※② 西暦 (**478**) 年のこと
 ※③「冊封された我が国は、中国から見てはるか遠くにあり」の意
 ※④「(そこで順帝は) 詔を発し」の意

武は当時の宋の皇帝であった (**順帝**) に対して、朝貢の遣いを派遣し、自分は倭と朝鮮半島の六国における地域的・軍事的権限を持っていて、これら7地域は全てヤマト政権の支配が及んでいると主張した。(略☆) 部分には、その根拠、すなわちヤマト政権がいかにして倭国内を統一し、さらに海を渡って朝鮮半島南部を支配下に置いていったかということが述べられている。そこで順帝は武に対して、「 **六国諸軍事安東大將軍** 」という称



号を与えた。一つ国の数が減っているのは（ 百済 ）が外されているからである。この国は既に宋の冊封体制に組み込まれており、その地域を支配することを皇帝に認められていたからだ。

[解答例]

4世紀、朝鮮半島北部には南下政策を行って勢力拡大を図る高句麗が進出し、南部では百済・新羅という統一国家が形成された。伽耶地域はいまだ小国分立が続いており、倭が先進技術や鉄資源の獲得を目的に進出した。4世紀末、好太王碑によると、かつての帯方付近で倭が高句麗と交戦し敗れた。5世紀になると倭の五王が南朝の宋に朝貢し、武は六国諸軍事安東大將軍という、百済を除く朝鮮半島南部の支配を認められる称号を得た。

(198 文字)



問. 4・5世紀の朝鮮半島情勢と、その地域における日本の進出について 200 文字以内で述べよ

